

# 王羲之『十七帖』の書法

——「断筆」書法の意味——

林 信次郎

## 『十七帖』のこと

『十七帖』は王羲之の草書で書かれた書状（但し、一紙は楷書の書状）を集めて一卷としたもので、古來、草書の典型として尊重されてきた。

しかし、王羲之の真跡は既になく、唐時代に臨書したものの、双鉤墳墨そうこうふんぼくによるものなどがあつたとされるが、それも今日目にするものの中にあるのかどうかも分からない。更に、それをもとに石に刻したものがあり、それらの中のいくつかを我々は今、目にする事ができるのである。宋以後、『十七帖』が草書の手本として広く用いられるに伴い、次第にその種類も増えて今は百種を越えるといわれる。それ故に現存の『十七帖』の中で王羲之の書の真を伝えているものはどれかということについては非常に難しいところがある。

\* 双鉤墳墨——原本の上に紙を置いて文字の輪郭を写

し取り（双鉤）、その後、粹取りした中を墨で埋めて（墳墨）複製を作ること。

## 断筆

今日残っている『十七帖』の中で特に書として優れ、拓本として良好なものは「三井本」、「上野本」、「中村本」などと呼ばれているものである。「三井本」は宋代の拓本として、現在は三井聴ちよんりやう冰閣に所蔵されており、「上野本」はやはり宋拓で、京都国立博物館蔵、「中村本」は中村不折の開いた書道博物館に収蔵されている。

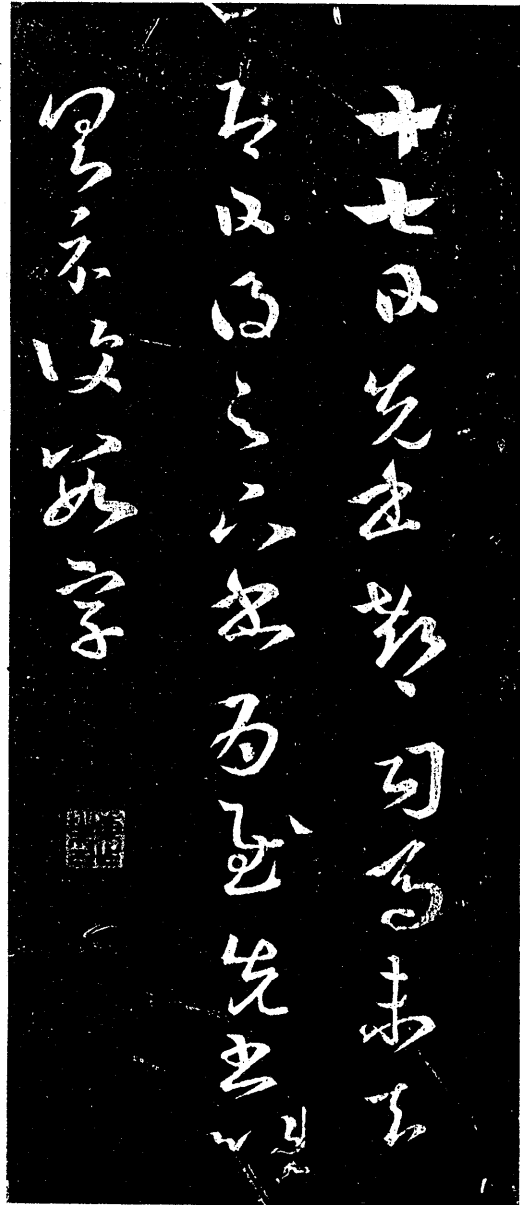
そういう優れた拓本であつても、例えば、「三井本」と「上野本」と比較してみると書風なり、文字の形なりが大いに異つているのである。

(1)

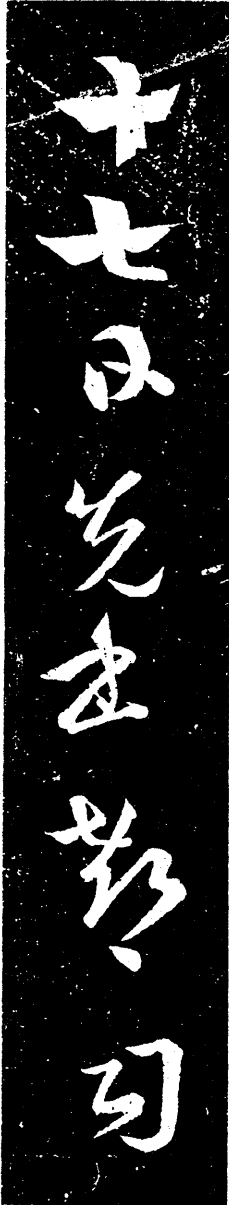
図版  
1

三井本十七帖（部分縮小）

十七日先書。 都司馬未去。 即日得足下書爲慰。 先書具示。 復數字。

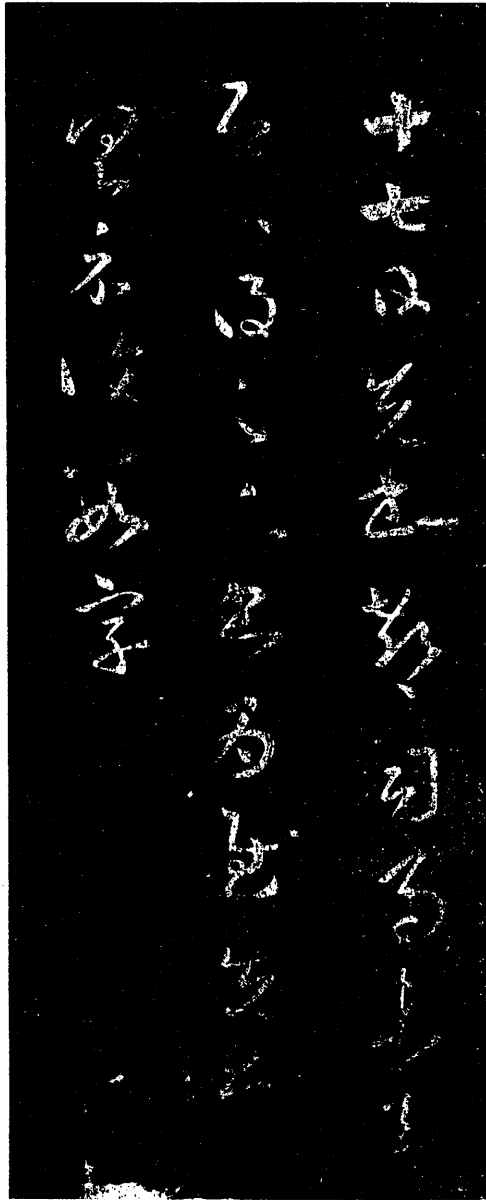


同（原寸）



図版2

上野本十七帖（部分縮小）



同（原寸）



(3)

(右図版1、2は、「中国法書選14『十七帖』二女社発行」より。以下、右二本を「三井本」「上野本」と略記する。)

とりわけ「三井本」で注目されているのが用筆法における断筆である。断筆は草書を書くとき、画が転折するところであつたん筆を離し、そこよりわずかに位置を移して筆を入れ直し、次の画を書くその書き方をいう。



(單) 11



(東) 4



(布) 11



(作) 4

(三井本より)

(右の図版の中の数字は、「中国法書選14『十七帖』

二女社発行」の中の『三井本十七帖』における文字の位置を示す行数。以下同じ。)

しかし、実際に草書を書く場合、このように画の折れ曲がる所でいちいち筆を離して書くことはないので、「三井本」以外の諸本ではこの断筆の用筆法は使われていない。これが同じ『十七帖』といいながら「三井本」の他の諸本と大いに異なる特色となっている。

それでもこの「三井本」は、断筆の部分が鑑賞のさまたげになるとはいふものの筆力のある文字として高く評価されている。

では、なぜ『十七帖』の一本に断筆を加えたのかについては、運筆のの要領を分かりやすく説明するためとか、草書の転折の部分は線が弱くなりやすいので運筆の急所に断筆を設けたと一般に説明されている。ほぼこの見方でいいのであろうが、なお具体的な用筆法とその意味について検討してみたい。

### 学習用の『三井本十七帖』

普通、草書といえば『上野本十七帖』のように点画の省略や連続を図りながら速く書くことよって成り

立つものであるから、断筆は真跡にはなかったと考え  
てよく、そのため、「三井本」の断筆は『十七帖』を学  
ぶ人に運筆の様子が分かるようにと手を加えて石に彫  
り直したものであろうと推測されている。

図版 3

「三井本」より（縮小）

これは『十七帖』の末尾にある次の文によって推察  
するものであろう。

付真弘文舖  
臣解无畏勒  
充館本  
臣褚遂良拔  
無失

僧權

勅

付直弘文館臣解无畏勒充館本

臣褚遂良校無失

僧權

この読みと釈を桃山艸介氏の「書聖名品選集2」（榊  
マール社）のものを借用して次に記す。

書き下し文

勅ちよく 弘文館臣解无畏こうぶんかんしんかいむいに付直ふちよくし、勒ろくして館本かんでんに充あてし  
む。

臣褚遂良しんちよすいりようこう校して失無しつみなし。僧權そうげん

釈文

勅。

搨書人解无畏による双填によって模本を作り、弘  
文館における学書に供する。褚遂良、これを校閲し  
て、一筆の誤りも見出さず。（徐僧權の押署）

（以上103ページ）

※筆者注（以下同じ）

搨書人とうしよじん＝名跡などを双鈎填墨（既出）などの方法

によって複製を作ることを専門とする人。

双填そうてん＝双鈎填墨の略。

模本もほん＝双鈎填墨によって作られた書跡。

拓本をさすこともある。

そして、その解説には次のように述べられている。

弘文館は（中略）虞世南、歐陽詢らを学士として  
書を習わしめた教修場です。なかに三人おかれた搨  
書人の一人が解无畏で、彼によって「十七帖」が双  
鈎填墨されたこともわかります。そして監修者が褚  
遂良であり、彼の校訂のもと、それが「学習用」と  
して供され、真蹟と一筆の誤りもないという確認が  
なされています。（同141ページ）

梁王室より唐に伝えられた「十七帖」が「充館  
本」、すなわち「学習用」につくられたという含み  
は、搨模の段階で「学習用」に改変されている可能  
性を示唆するものです。（中略）「館本十七帖」（筆者  
注、三井本）は、王書を学ぶ為につくられたテクス  
トをもとにして、後代上石された刻本であります。

（同141ページ）

※搨模とうも＝双鈎填墨によって、原本を写し取ること。

この説明で「三井本」の性格がよく理解できる。このことを念頭において話を先へ進めたい。

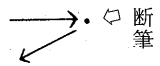
断筆の用筆法

これより「学習用」とされる「三井本」の文字の断筆について、用筆法の上から考えていく。

「三井本」の文字は画の転折の所をことごとく切断しているという人もあるが、これは言い過ぎで、どの字も画の転折する所は全部が全部断筆、つまり一続きに書く所を二筆に書くというようにはなっていない。折れ曲がる所を普通に続けている文字もたくさんあるのである。そういう中において断筆が非常に目立つて数多くあるということである。

そういう断筆の文字を見ると、一つの文字の中で断筆をする箇所はほぼ次の三つと見ることができであろう。

- 1 左の方から来た線を受けて又、左下方向に返す部分

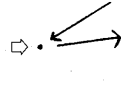


(懷) 5



(政) 37

- 2 右上方から来た線を受けて、右、又は右下方向に返す部分



(財) 11



(垂) 39

- 3 上から来た線を右上方に返す部分



(計) 13



(得) 17

以上の文字例は著しく明瞭なものを出したが、注意して見ないと断筆かどうか判別できないものも多数ある。



(具) 3



(即) 2



(甚) 8



(先) 2



(字) 3



(保) 8

同じ転折でも、上から来た線を左上方にはねる所と、  
 戈法(「式」の五画目の書き方)のはねの部分や、乙おっに  
 ようのように曲がりを通つてからののはねの部分では断  
 筆は使わないようである。



(或) 17



(慰) 84

断筆の部分のものと用筆法

王羲之の多くの書跡の中から必要な文字を拾い集め  
 て作られた『集王聖教序』(『集王聖教序』ともい  
 う)、言わば、王羲之の用筆法の集約本ともいうべき本  
 によつて文字の転折の部分を見ると、『三井本十七帖』  
 における断筆は『集王聖教序』の行書の折れの書き方  
 の延長であることが分かる。



(帝) 2



(福) 3



(軍) 4

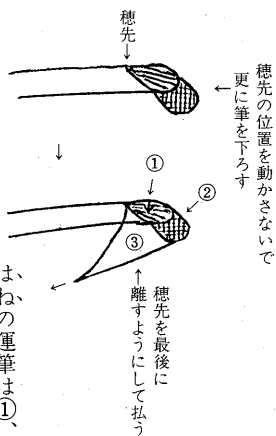


(罪) 68



(「原色法帖選16『集字聖教序』二玄社発行」より。数字は位置を示す行数を表わす。以下、「聖教序」と略記する。)

この「聖教序」の筆使いは左から来た筆をいったん止め、次に穂先の位置を動かさないで更に筆を右下方に向けて下ろす。その上で筆を左下方に払うようにしてはねている。



はねの運筆は①、②、③挙動。



(宜) 4



(廻) 4

(『がつきろん楽毅論』より)



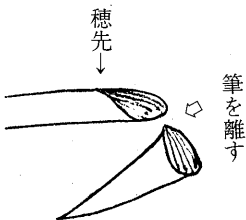
(田) 3



(審) 3

(『黄庭経』より)

「三井本」では、左から来た筆をいったん止め、それから筆を紙面から離し、わずか右下の位置に筆の穂先を移してその上で左下方に筆を運んでいる。



しかし、これが画の転折の用筆法を説明するといっても、これはむしろ、行書の『集王教聖序』、楷書の『楽毅論』、『黄庭経』の転折の仕方をそのままよく見る方が、その用筆法は自然と分かるのではないだろうか。試みに、今、「三井本」と「上野本」の同じ文字を二例出して比べてみる。

転折の部分は断筆で書くより、「上野本」のように一続きで書く方が書きやすく、リズムも取りやすいだろうと思う。

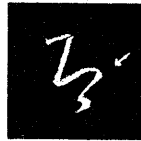
この筆使いは、縦の線から右上の方に払う形のものでも同じである。何も転折の要領を断筆で示さなくて



(何) 90



(耳) 32



(三井本)

(即) 48

(上野本)



筆を離して右に移している



(得) 46

(三井本)

も、「上野本」の文字の例のようなものを素直に見ればその筆使いは分かることである。



筆を少し右に移動させて上に



(何)



(得)

(上野本)

この形のもの「集王聖教序」にも多く使われている。



(像) 5



(潜) 13

(「聖教序」より)

ただ、おもしろいことに「集王聖教序」の中に二例、断筆に近い用筆法が見られる。



(庸) 7



(賢) 8

(「聖教序」より)

但し、「賢」は、他の本では



となつてゐるのがあるから、王羲之自身が新筆で書いたかどうかは断言できない。しかし、「庸」によつて、王羲之か、「集王聖教序」にかかわりのある人の中

に誰かが断筆的な書法を既に用いていたという例になるかも知れない。

又、画の左側の部分で転折する時の断筆の用筆もやはり、前に説明した二つの転折の部分の断筆と同じ要領である。



△線はつながっているが断筆と同じ用筆法



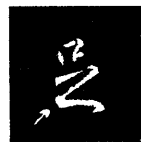
(当) 54

(「三井本」より)

これにも「集王聖教序」には断筆的な用筆法が見られる。



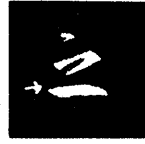
(能) 93



(足) 42

(「聖教序」より)

次のは断筆法を用いた例になるだろう。



(之) 37



(難) 11

(「聖教序」より)

『集王聖教序』にも断筆的な用筆法が例は少ないが何字か見られる。これは、運筆上自然に生まれてきたものであつて、「三井本」のものは、断筆をわざわざ作つたようになってゐる、そこが両者の違いである。

このように『集王聖教序』の字例を勘案してみると、やはり「三井本」の断筆は、転折の筆使いを教えたものと受け取つてもよいだろう。

### 断筆と書くリズム

それでは、この断筆で何を教えようとするのか、それを考えてみたい。結論的に言えば、書くリズムの基調を作るためであろうということである。断筆した次の画が書くリズムの基調になり、その線と同方向に書く線は次に線が切れるか、断筆されるまでは強調され、

書く速さも他の線より速めに書くことを教えているのであろう。

### 1 左下方向へのリズム



(別) 13



断筆 基調になる線

↑リズムに乗る線  
↑リズムに乗る線

黒い線の部分が書く時に強調される線(以下同じ)



(乃) 23



断筆

基調になる線



(後) 14



基調になる線

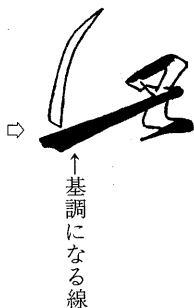
2 右横方向へのリズム



(氏)  
76



(此)  
55



(五)  
16



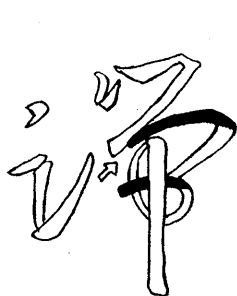
(馬)  
1



3 右旋回の上部分がリズムの強調される部分



(端)  
11



(具)  
3



強調される部分



(頤)  
39





(遂)  
35



(何)  
90



断筆の次に来る画が画の連続の基調になるといってもこれで全部が説明できるものでもないが、大方はこれに当てはまる。右の三つの型の中、1の型が非常に多く、3の型は極めて少ない。

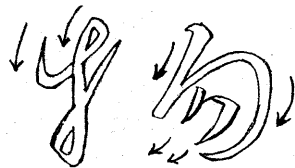
これらは、楷書でも行書でも、一字、あるいは一字の部分の第一筆が、その文字あるいはその部分を書く基調になると相通するものがある。



(物)  
7



(易)  
36



書き始めの線のそりの向き



書き始めの線のそりの向き  
(『集王聖教序』より)

※『集王聖教序』の用筆法の特徴については拙稿「王羲之『集王聖教序』の書法」を参照されたい。――「文学部紀要4」文科大学文学部一九九〇―

『十七帖』と楷書の書法

唐時代の草書、例えば孫過庭の『書譜』や僧智永の『閩中本千字文』などの草書を見ると線に丸をが

り、字形も角のない柔構造的な感じがある。(図版4、5)

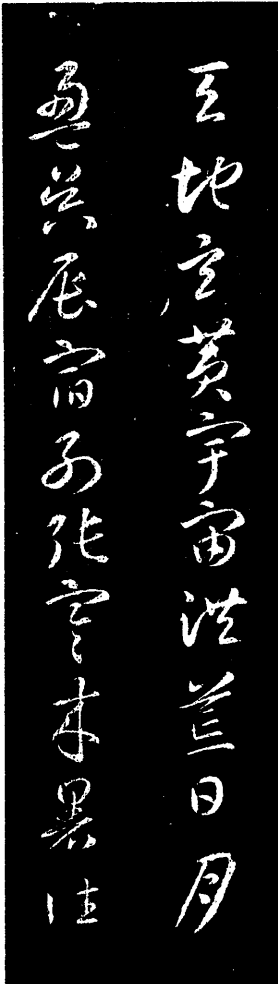
図版4

孫過庭『書譜』(部分縮小) 書譜卷上。吳郡孫過庭撰。夫自古之善書者。漢魏有鍾張之絶。晉末稱二王之妙。王



図版5 僧智永『閩中本千字文』(部分縮小)

天地玄黃。宇宙洪荒。日月  
盈昃。辰宿列張。寒來暑往。



ところが『千字文』は「上野本」を見ても言えることであるが、かなり直線的な所がある。それは時代性であろう。王羲之が草書を完成させたことと関連する。草書が行書を更にくずした形で生まれたのではなく、楷書と共に隸書から発達したものとされている。王羲之はその楷法が完全に抜けない形というより、楷法

をも取り込みながら草書の完成へと進めていったのかも知れない。又、隸書的な書き方も取り込んでいる。次の「十」「七」は、手紙の最初の文字だから相当に意識して書いたであろう。これは隸書(図版6)のような書き方である。

図版6 隸書の一例『史晨碑』(部分縮小)



…仲尼汁光  
…大帝所挺





(十) 1



(上野本)



(七) 1  
(三井本)

『十七帖』の草書の用筆法の説明に断筆を用いた理由は、先に挙げた、リズムの基調になる画を示すものと合わせて、もう一つ、楷書的な書き方をする草書にリズムを持たせるためと考える。草書で大事なのは運筆の流れるようなリズムだからである。

次のような文字は、そのままリズムはつかめる。



(川) 50



(土) 50

次のような文字も比較的リズムは取りやすい。



(山) 50



(佳) 34

次のは断筆を多用した例である。



(吾) 4

一字を六画で書く形に  
なっている



(竹) 46



(傾) 16

この書き方は、一つ一つの画の始筆と終筆の形にこだわって、筆先で細工するようだと言文字を書くリズム感はつかめない。端的な筆の入れ方、止め方をして線を書くことが肝要である。「上野本」の方は全体的に「三井本」より曲線的で丸みがあるから「三井本」のより穏やかな感じがするだろう。そういう文字に骨格を持たせるため、学習用として断筆法を取り入れたものが見ることができそうだ。

### 結び

『三井本十七帖』が他の種の『十七帖』と大きく異っている点は「三井本」が断筆の手法を用いていることであつた。これを用いた従来の説の用筆法の解説のためということをもう一つ踏み込んで、書くリズムに深いかかわりがあること、及び楷書的な書き方を取り入れて、草書に骨格を持たせたということを説いてみた。ただ、書道史上の書跡に断筆を用いた例が他にあるかどうか。今のところないと思われるので、比較検討をする手続きを取ることができない。

なお、今後も『三井本十七帖』の中の文字及び、その他の書跡を精査して断筆の意味するところを更に究め、又、断筆の外の草書の用筆法についても研究を進めていくことになろう。